

「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」(14 節)。13 節の「霊によってからだの行為を殺して、生きるようになる」ことが「神の霊によって導かれる」とまとめられ、言い直されています。「皆」と訳された語は、「～するかぎりの者はだれでも」の意味です。どの人種・民族の人でも、どの宗教の人でも、どこかの教会に所属していてもいなくても、そういう状況とは一切無関係に、人間は神さまの霊に導かれ、霊によって生きている限り、だれでも神の子なのです。15 節で、新共同訳は原文を意識していますが、パウロが述べているのは、「あなたがたは、再び恐れへと至る隷属の霊をうけたのではなく、むしろ神の子になる資質(神の子とする霊)を神さまによって与えられた」ということなのです。キリストを信頼する者が受けた霊は、本来子でない者に子として立場と権利を与えるという法的な意味だけでなく、子としての実質を与える霊であるということなのです。パウロはイエスが元々神の子であることと、私たち人間が神さまによって認められて神の子とされることをはっきりと区別しています。キリスト者は、キリストにある場において、神さまの霊の働きを受けて生きているのです。それが「神の霊によって導かれている」という現実です。そのキリストにある場において、私たちは恐れに陥れる奴隷の霊ではなく、神の子とされることの霊を受けたのです。また、「恐れへと至る隷属の霊」という表現を用いる時、パウロは律法に下にいるユダヤ教徒を考えていると思われます。ユダヤ教徒は、断罪への恐れから律法の要求に従うことを必死に追求しました。

私たちは礼拝などに際して神さまを「父」と呼んでいます。神さまを父と呼べるということは、私たちは神の子だということです。神の子であることは、神さまの資産、すなわち神さまの栄光を相続する立場にあることを意味します。キリストとともに生きるのは、栄光も苦難も、キリストとともにしているからです。キリストとともに生きることの喜びを知らない人は、キリストとともに栄光を受けることも分からないのです。大事なことは、自分が受ける利益ではなく、キリストとともに生きることであり、神の家族の一員となったことだからです。初代教会は、集会の最中に、「アッバ、父よ」と叫ぶ声が聞こえたと思われます。主の祈り、特にルカによる福音書に伝えているものは「父よ」という言葉で始まっています。今日、私たちは、礼拝の中で、「アッバ、父よ」と叫ぶようなことはしません。しかし、私たちはその生活の中で、様々なことに会うたびに、確信を持って、しかも親しみをもって、「アッバ、父よ」と呼ぶことができなければならないと思うのです。